

『僕がめざす剣道』

福島県

汲深館

小学6年生

則 政 拓

ぼくには、齢の離れた兄が二人いる。兄達は、ぼくが生まれる前から剣道を習っていた。ぼくは、母のお腹の中にいるときから、竹刀や踏み込みの音、大きな気合いを聞きながら育った。物心ついたぼくの生活は、当然、剣道中心だった。兄達の試合の応援に出かけること。それがぼくにとっての剣道のスタートだった。「剣道は楽しい。」そう思っていたぼくは、いつからか、「ぼくも早く剣道を習いたい。」と思うようになった。

実際に、剣道を習い始めたのは、小学校一年生のときだった。「先生の話をしっかり聞けるようになってからじゃないと剣道はできないよ。」といて、なかなか、母は、習わせてくれなかった。「どうして、ぼくだけ。」そのとき、ぼくは、母の気持ちを理解することができなかった。今思えば、そのとき始めていたら、きっと、根を上げて、あつという間にやめていたかもしれない。

やっと、許可が降りたときには、時すでに遅し。兄達は、中学、高校に進み、剣道を一緒にする機会がほとんどなかった。ぼくは、兄達と一緒に稽古ができない寂しさを感じていた。しかし、稽古はできなかったけれど、ぼくは、兄達から、大切なことを学んだ。

上の兄は、剣道が大好きで、稽古を休まず、道場へは一番乗り。家での素振りも、毎日欠かさない人だった。その兄が、高校生のとき、選手になれず、落ち込んでいる時期があった。大学受験との両立で、いつも疲れ切っている兄。ぼくは、とても心が痛んだ。そんなある日、いつも穏やかな兄が母と口論している声が聞こえてきた。

「稽古で手を抜いた事なんてないのにさ。もっと剣道に向き合えって言われたよ。」

「もう受験も近いし、剣道はほどほどにしたら？一生懸命じゃないと思われているのなら、無理しなくてもいいんじゃないの？」

「絶対やめないよ。試合に出るとか出ないとかの問題じゃない。今まで頑張ってきたことが無駄になる。自分のために、最後まで続けるから。」

力強い兄の言葉だった。ぼくは、いつも一生懸命努力する兄の姿を見てきた。それと同時に、思うような試合ができず、負けてばかりの兄の姿も見えてきた。ぼくは、正直、試合に出られないのなら、そんなに頑張らなくても良いのではないかと思っていた。それでも、あきらめず、努力を続ける兄。そんな兄の姿に、とても大切なことを気づかされた。それは、「試合に出る人、勝つ人が一番じゃない」と言うことだ。本当に強い人は、あきらめず、努力し続ける人だと、そのとき、ぼくは気づいたのだ。

兄は、部活を続け、その後、どうしても勉強したいことがあると浪人をしながら、今年やっと念願の大学に入学することができた。その時も、とてもすごい精神力で、最後まであきらめなかった。周りの家族が半ばあきらめかけても、くじけなかった。それは、剣道を頑張っていたからこそ、できたことだとぼくは思う。勉強の合間に続けた素振りは、兄を支えたにちがいない。

兄は、最近、ずっとやっていたいなかった剣道を再開した。ぼくも、久しぶりに試合の応援に行った。ブランクがあったので、確かに動きがいいとは言えない。しかし、そのときの兄の姿は、剣道ができる喜びにあふれていてとても楽しそうだった。ぼくは、兄がかっこよく見えた。

ぼくの剣道はこれから。試合で一本が決まらなかったり、掛かり稽古で先生に飛ばされたり、つらくて、泣きたいときもある。でも、友達から学んだ、「つらいこともあきらめずくじけず、全力でぶつかる精神」を持ち、心も体もたくましい、本当に強い剣士になれるよう努力したいと思う。いつか、友達と一緒に、稽古ができる日を夢見て。